

Title	昭和三十一年度秋季北九州方面見學旅行記
Sub Title	
Author	小谷, 俊彦(Kotani, Toshihiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	1956
Jtitle	史学 Vol.29, No.3 (1956. 12) ,p.131(359)- 136(364)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19561200-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙報

昭和三十一年度

秋季北九州方面見學旅行記

今年度の見學旅行地は北九州と決定したので、日程の關係上變則的に夏休みを利用することになった。伊木先生、淺子教授、河北助教授の指導の下に七月二十二日から四日間に亙り參加學生四十名を以つて行われた。

七月二十二日 晴

午前十時宇佐驛集合。貸切バスにて先ず富貴寺へ向う。車中では案内の爲同行された中津高校の田邊氏（國史先輩）福田氏より國東半島の文化について説明を受ける。それによると國東半島は宇佐八幡を中心とした一つの神佛習合文化圏で、富貴寺、眞木大堂等は奈良平安の昔六郷満山と謳われ、二十八山六十五ヶ寺が榮えていたその文化の名残りで、大友時代のキリスト教の保護獎勵に辛うじて残つたものであるということである。

田染川に沿つて遡る事約一時間蓮華山富貴寺に着く。同寺は養老年間仁聞菩薩の開山と傳えられているが、今は阿彌陀堂所謂路の大堂を残すのみである。櫃の一木で造られたというこの大堂（國

寶）は九州最古の建造物で桁行三間、梁間四間、單層、寶形造、四方に廻縁を回らした簡素な素木造であり、本瓦葺の屋根には鐵製の寶珠及び露盤をあげている。柱及び枋棋に見られる大きな面取が特に印象的で、平等院鳳凰堂・法界寺阿彌陀堂・中尊寺金色堂と共に藤原期の阿彌陀堂建築の代表的なものである。堂内は方一間を内陣として佛壇を設け、前面二間通りを外陣に當てている。天井は外陣小組格天井、内陣折上げ小組格天井で、内陣の後方二本の來迎柱の間の板壁には觀經の淨土圖を、小壁、柱、長押等には佛菩薩、室相華文等が描かれている。これらの壁面は剝落が甚だしいが、巨勢金岡の筆と伝えられ、鳳凰堂の壁面と共に藤原時代の貴重な遺品である。本尊の阿彌陀如來坐像（重要文化財）はもとは漆箔塗りであつたらしく螺髪にその名残が認められる。面相姿態は典雅溫麗で定朝様式を示している。境内に仁治四年（一二四三）文永五年（一二六八）の刻銘のある二基の笠塔婆があるが、これらはこの地方獨特のもので國東塔と呼ばれ、五輪塔から板碑へ移る過渡的な形式で、板碑の祖形と見られるものである。尙同寺には末寺跡から發掘された佛の坐像を現わしている丸瓦が所藏されている。

眞木大堂へ向う途中元宮の磨崖佛を見學した。これは不動明王（六尺七寸）毘沙門天（七尺）持國天（六尺一寸）矜羯羅童子（三尺七寸）及び地藏菩薩（四尺二寸）で、仁聞の作と伝えられ

るが室町時代のものと推定される。尙地藏菩薩は後世の追刻という。

眞木大堂は馬城山傳乗寺といふ、現在は江戸時代の粗末な唐様の一字が残存するのみであるが、堂内に阿彌陀如來坐像（七尺）四天王（五尺三寸）不動明王（八尺三寸）二童子（四尺二寸）大威德明王（七尺）が安置されているが、九體とも重要文化財に指定されている。この様に巨大な佛像が一堂に集っているのは珍らしく、特に不動明王とその二童子及び大威德明王は堂々たる大作で、何れも藤原時代の秀作である。これよりバスは峠を越えて宇佐八幡へ向う。

神護景雲三年（七六九）和氣清麻呂が稱徳天皇の勅使となり、託宣によつて僧道鏡を斥けたことで有名な宇佐神宮は、應神天皇・比賣大神・神功皇后の三柱を祀り、境内頗る廣く大木の生い茂つた小椋山の頂上にある。本殿は三棟から成り、各殿とも桁行三間、梁間四間で、桁行三間、梁間二間兩流れ造の社殿を後方に、桁行三間、梁間一間の社殿を前方に建て、兩殿の間に兩樋を設け一間の細殿を造り、兩殿を連續させて一字とし、前殿を外陣後殿を内陣とした所謂八幡造の古様式を傳えたもので、神社建築史上貴重な遺構である。現在の本殿は安政四年（一八五七）から文久三年（一八六三）まで六年間の歳月を費して造營されたもので國寶に指定されている。寶物殿には見るべきものなく、僅に唐代天復四

年在銘の銅鐘（重要文化財）あるのみであつた。次いで社務所で豊前大守大内義見奉納の「八幡宇佐宮御託宣集」及び古文書類を拜見した。

バスは再び宇佐驛に我々を運び、これより汽車で福澤先生の故郷中津市へ向う。「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」と「學問のすゝめ」の冒頭の一文を大きな額に彫つた中津驛より徒歩約十五分市内留守居町の舊宅へ行く。これは先生在津中二度目の家で最初のは現在不明である。藁葺平屋建の母屋一棟と荒壁造の納屋がある。納屋の二階は當時の勉強部屋であつたといわれ、天保七年三才の時より安政元年二十一才の春の長崎遊學の際まで起臥した所である。更に舊宅前の記念館を見學後、福澤家の墓の残る明蓮寺に立ち寄り、夕暮近く宿に着く。丁度この日は中津のお祭日でもあつたので、橋本昌直氏から祇園祭の説明を拜聴し、同氏撮影の祭の映画を見せていたゞいた。

七月二十三日 晴

早朝中津を後にし福岡へ向う。博多着十一時。福岡三田會幹事の方及び國史先輩松本芳三郎氏の出迎えを受け直ちに市電にて宮崎宮へ行く。同宮の祭神は應神天皇・神功皇后・玉依姫命で、延喜式の名神大社とされている。しかしその鎮座年代は不詳であるが、香椎宮と共に國防の守護神として王朝以來皇室の崇敬特に篤いものがある。社域は大江匡房の「宮崎記」に「坤艮三十余丁、

乾巽七八丁許、敢て他木なし、只青松のみ」と記されている千代の松原までで、本殿から樓門鳥居を通して遠く海を望むことができる。鳥居は本殿に近い方から数えて一ノ鳥居二ノ鳥居と呼んでいる。一ノ鳥居（重要文化財）は黒田長政の寄進になるもので、慶長十四太歳舍己酉季秋中旬」の銘が刻まれている。柱は三段に切れ、下肥りになつて台石に續き、笠木島木が一つの石材で造られ、先端が鳩の胸の様に反り上り、貫も笠木と同じ長さ、額束が著しく迫り、他の鳥居と異つていて而もよく均衡がとれている。この鳥居には「豊臣黒田筑前守長政」の刻銘もあるが、慶長五年の關ヶ原役に徳川家康に従い、その功によつて筑前五十二萬石に封ぜられた長政が敢て「豊臣」と稱しているのは何故であろう。この様なところに戦國武將としての長政の一面が窺われるのではなからうか。樓門（重要文化財）は文祿三年（一五九四）小早川隆景の造營になるもので、三間一戸、入母屋造、檜皮葺で上層は小天井を有し、枳組は和様三手先を用い、尾極を加え、中備に斗束を配し、各部の手法に桃山時代の特色を示している。建坪は十二坪であるが八十三坪にも余る雄大な屋根を持つた建築上稀に見る豪壯な建物である。尙正面に有名な「敵國降伏」の扁額を掲げ門扉に桐の紋様、葦座に千鳥の彫刻が施されている。拜殿及び本殿（共に重要文化財）は天文十五年（一五四六）大内義隆が造營したもので、拜殿は桁行四間、梁間一間、單層、切妻造、檜皮葺、

二重虹梁墓股を有する簡素な素木造である。本殿は九間社流造、漆塗、檜皮葺で正面に五間の向拜、左右に總造車寄があり、四方は廻縁、縁端に細い柱を立て、黒色の部戸がある珍しい構造で、總立坪は四十六坪に及ぶといわれる。寶物殿では有名な「敵國降伏」の御宸筆をはじめ「天正十五年六月十八日於管崎松原御當坐」とある豊臣秀吉の茶會の時の和歌短冊、大内義隆以下持明院基規・冷泉隆豊・萬里小路惟房等の和歌色紙、文祿四年十二月の秀吉檢地文書、黒田家歴代の社領寄進狀一卷、孝明天皇の攘夷の論旨等を拜見する。境内には千利久寄進の觀應元年（一三五〇）六月廿八日在銘の石燈籠、元寇當時の蒙古軍船の碇石、謠曲「唐船」に詠われている唐船塔等がある。

これより二班に分れ、一班は九州大學を経て元寇防壘跡へ、他の一班は東光院へ向う。

第一班 一時三十分管崎宮を出て徒歩で九州大學へ向う。その間約二十分。そこでは先ず九州文化史料研究所に案内される。近世九州關係史料例えば長崎外交文書、對馬の奴隸の人身賣買關係の書類、天草に於ける幕府勘定帳などが整理されている。現在日本に二冊しかないといわれる「華夷變態」（四卷）なる貿易關係の書物を見せていただく。續いて考古學教室に案内される。こゝでは彌生式時代、古墳時代のものが主として蒐められていて、甕棺、志都ドルメンの發掘物（一つのドルメンに僅か十八箇の遺物

しかない、それに鏃八點その他）銅鐵の劔、鐵斧、轡、鐘、骨壺、古瓦（大和九州新羅）などを見る。それから九大の檜垣元一先生の御案内で市内に残る元寇防壘を見に行く。市電で約五十分、防壘前という停留所で降り通りを右手に曲る。

こゝに残る防壘は文永十一年の蒙古襲來の後、西今津濱より多々良河畔にわたり築造されたものゝ、一部で、當時はこれを異國要害石築地と呼んだという。こゝは現在の海岸線から二百米引き退つた地點で、砂丘の後退のため埋れ、松林の丘になつてゐる所が七、八米にわたり發掘されている。石垣の高さは約二米、現在露出している部分は約一米、巾は二米半、やゝ粗く積まれた石は大きいものでも徑約五十糎位である。

第二班は市内堅粕町の東光院に向う。當寺は大同元年（八〇六）傳教大師が建立した堅糟山東光院藥王寺が後荒廢したのを、正保年間黒田忠之が今津の東光院と合併したものと傳えられる。コンクリート造の堂内には藤原期の様式を示す藥師如來立像（重要文化財）とこれに附屬する十二神將像（重要文化財）藤原末期の藥師如來坐像（重要文化財）とその十二神將像（重要文化財）鎌倉期の阿彌陀如來立像（重要文化財）鎌倉中期の日光菩薩立像（重要文化財）が安置されている。同寺拜觀後元寇防壘跡へ急行第一班と合流し、西日本鐵道で都府樓跡、觀世音寺へ向う。車中水城跡を望見する。天智天皇三年（六六四）に太宰府防禦のために構

築された堤で内部に水を貯え外敵來襲に備えたもので、長さ一軒に及ぶと聞く。

都府樓跡 今は七十余箇の礎石を残すのみのその敷地は二軒平方以上に及ぶといわれ、平城京に模して條坊制を布いていた痕跡は今日わずかに田甫中に認めることができる。都府樓跡の正面、西南の方向に菅原道眞の配所樓寺の森更にその後方に彼が遙に東天を拜したという天拜山が望まれる。

觀世音寺は天智天皇が御母齋明天皇の御追福の爲に建立された勅願寺で、奈良の東大寺、下野の藥師寺と共に日本三戒壇の一と稱せられ、西日本隨一の大寺院であつたといわれる。現在戒壇院は觀世音寺から分離して、博多の聖福寺に屬している。その堂宇は江戸時代のもので、本堂に安置されている本尊盧舍那佛（重要文化財）は木造漆箔高さ約五尺藤原末期の作である。觀世音寺は元祿年間の再建になるもので昔の面影を偲ぶすべもないが、本堂と阿彌陀堂（金堂）に安置されている多數の佛像是藤原期から鎌倉期にかけての作品でその數二十余體、重要文化財に指定されているものは聖觀音坐像同立像各一體・不空絹索觀音立像・十一面觀音立像四體・馬頭觀音立像・吉祥天立像・毘沙門天立像・阿彌陀如來坐像同立像各一體・四天王像・大黒天立像・地藏菩薩半跏像の十八體で總て木彫である。又銅鐘（國寶）は道眞が「都府樓纔看瓦色觀音寺唯聽鐘聲」と詠じたので名高い。同夜武藏溫泉

宿泊。

七月二十四日 雨後曇

貸切バスで太宰府神社へ向う。出発前から降り出した雨は同社へ着く頃にはすっかり上つていた。社前で九州大學名譽教授長沼賢海先生、宮司西高辻氏の御説明を受ける。同社の起原については菅原道眞が延喜三年(九〇三)二月二十五日その謫居の地榎寺に歿するや、柩車安樂寺の地に至りて動かず、即ちそこに葬つて廟

所とし、同五年隨臣味酒安行が始めて神殿を造り天満大白在天神と稱したと伝えられる。次いで同十九年(九一九)左大臣藤原仲平が勅を奉じて更に紫宸殿に模した社殿を造營した。現在の本殿は天正十九年(一五九一)小早川隆景が再建し、後黒田長政入國の時更に修理を加えたといわれ、朱塗りの壯麗な九州屈指の桃山建築である。本殿は五間社流造、檜皮葺、紫宸殿を模したものといわれ、正面中央に大唐破風の向拜、左右に車寄を備え、神佛混淆のため内陣外陣の形式を採っている。重要文化財である。境内反橋際の小社志賀社(重要文化財)は長祿二年(一四五八)の再建になるもので、方一間、單層、入母屋造、柿葺、正面に千鳥破風とその前に唐破風を備え、料枳四手先詰組、尾榑を加え、支輪及び軒天井を有し、更に各面中央に墓股を配し、腰四方に廻縁及び高欄を附け、その下の腰組には四手先挿肘木を用い和様唐様及び天竺様を併用し室町末期の粹を蒐めた建築である。寶物殿には

傳菅公佩用毛拔形太刀、青江俊次作太刀(共に重要文化財)の二口を始め連華唐草文塼斷片、菅公遺墨等數多の寶物が收められているが、就中特筆すべきものは東洋最古の歴史「輪苑」の平安初期から中期頃の寫本(國寶)一卷である。又境内博物館には七卿都落の際の所持品、天満宮祭具等をはじめ附近より出土した古瓦、銅鏡等が陳列されている。

再びバスに乗り久留米市の高良神社へ向う。同社は標高三百米余の高良山の頂上近くにあり、一同坂道をあえぎながら登る。山頂の眺めは雄大で遠く雲仙岳を望み、筑後川に縦斷された筑後平野が有明海に向つて開けているのが一眸の下に收められた。社は履中天皇の御代の創建と伝えられ、祭神は高良玉垂命となつている。現在の社殿は萬治三年(一六六〇)の造營になるもので九州には珍らしい權現造であるが、これは黒田・鍋島・細川の諸氏間に目付役の形で封ぜられた有馬藩が徳川の威勢を示すために造られたものといわれる。記録に依ると同社は古くは九州の總社と崇められ、小貳・大友・島津・菊池の四氏が輪番で奉仕したといわれている。高良山は地の利を占めているため、鎌倉末期より豪族は、この山を據點とし、更に南北朝時代、菊池氏が懷良親王を奉じてこゝに籠り、又天正十五年には秀吉が滯陣するなど九州諸豪族の興亡の歴史が秘められている。同社に傳わる「平家物語」(十二冊重要文化財)灌頂卷の末に「于時應安四年辛亥三年十五日

僧覺一」の奥書があり、全國に唯一の紙本墨書として有名である。尙同社で古書、古文書等拜觀中、伊木先生が卷子の裏打に用いられている應安元年の「國中課役」に關する院宜を發見されたことを附記しておく。次いで同山を圍んだ古代遺跡神籠石を見學。その構築の理由については種々論議があるが、その石材は大は徑三米小は七、八十糎、大部分が秩父古成岩で現存約千五百個といわれその規模に驚く。これよりバスで鳥栖へ出此處で二日に亙り我々を指導された先輩松本氏とお別れし、汽車で最後の見學地長崎へ向う。

七月二十五日 晴

連日の強行軍で一同疲勞の色が濃い。長崎市内を徒歩で見學。三方を山に圍まれ深く入りこんだ海、街は狭く丘や坂が多い。出島跡を経て大浦天主堂（國寶）へ行く。我が國最初の切支丹殉教者の靈を祀るため、元治元年（一八六四）フランス宣教師フューレの建てたゴシック建築で日本最古の教會堂である。慶長二年（一五九七）切支丹信者二十六人が處刑された西坂に面して建てられてをり、正しい名稱は「日本二十六聖人記念堂」というのだそうである。堂内正面祭壇背後のステンドグラスの美しさに一同驚きの聲をあげる。次にグラバー氏邸を見學する。庭は洋風回遊式庭園で多角形の木造洋館が建っている。石疊の道をたどつてオランダ坂へ出崇福寺へ向う。

崇福寺は俗に支那寺といわれ、寛永六年（一六二九）福州方面

から來た航海業者が資金を集め、江戸幕府の許可を得て建立したもので、全く中國風の寺院である。堂宇中殊に大雄寶殿（本堂）は明朝末の特徴を示し、我が國黃檗派に屬する最初の建築である。當寺の第一門である三門（重要文化財）は三間三戸、重層、入母屋造、本瓦葺、その形式は所謂龍宮造と稱するものであり、軒が著しく反り下層は側石の上に桃色の漆喰を塗り竈形をなしている。一峰門（國寶）は朱塗の四脚門で料枳は天竺様四手先に屬する。本堂（國寶）は桁行五間、梁間六間、重層、入母屋造、本瓦葺朱塗の建築である。料枳は三斗で繪様肘木を用いよく明末の様式を示している。護法堂（重要文化財）は桁行三間、梁間五間、入母屋造、本瓦葺朱塗、料枳天竺様挿肘木の三手先。護法堂と並んだ鐘鼓樓（重要文化財）は桁行三間、梁間二間、重層、入母屋造、本瓦葺、朱塗で軒の反りは三門と同様著しく天竺様二手先料枳が用いられている。同寺の十八阿羅漢像は明の佛師范道生の作といわれ珍しいものである。境内の大釜は天和二年（一六八二）の大飢饉に、時の住職千駄和尚が私費を投じて米四石二斗を炊ぐ巨釜を鑄させ施粥したものであるという。

さて四日間に亙つた見學旅行も、崇福寺を最後に無事終了し、午前十一時崇福寺境内で解散した。

最後に今回の旅行に際し、見學の便宜を計つて下さつた社寺文化團體、學校關係の當事者の方々、宿舍その他なにくれと面倒をみて下さつた三田會關係の各位、直接引率指導に當られた伊木先生淺子教授、河北助教授に深く感謝する次第である。（小谷俊彦記）